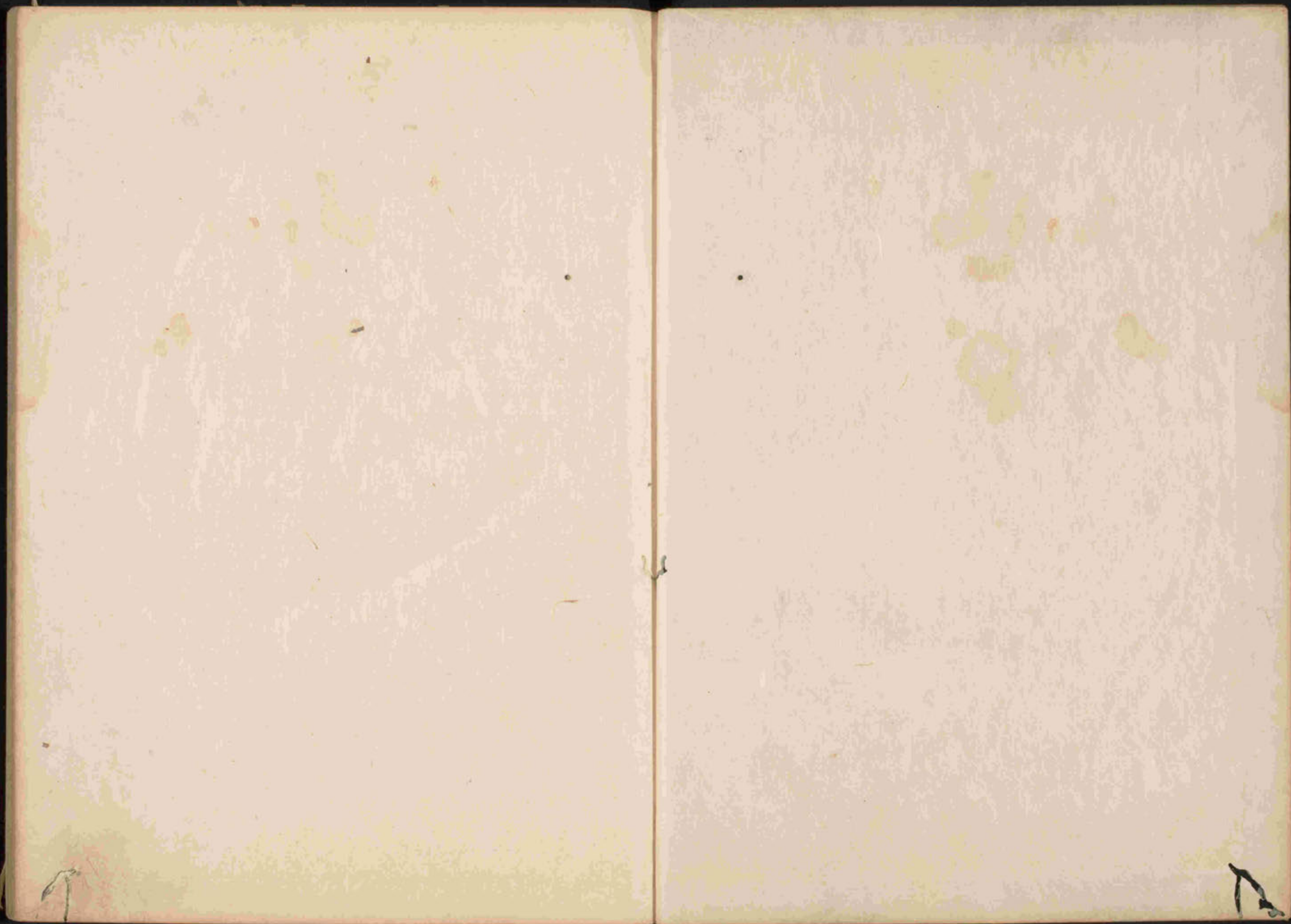


真本

上
三
下
口
神
心
防
立



城地老雅在城... 第十... 五...

安波一

安波

安波

安波

安波

安波

安波

安波

安波

安波

安波

安波

安波

安波

安波

7

7

五七

おろし川やうたふらふら言はれしそとふらふら言はれしそ

家集月前社松

古内院小宰相

きつこ山月をこの山出ろめく松の影くらげの影くらげ

顔不知 古来行人

中洲言家持

書けり此の川よりとあはれとせとあはれとせとあはれとせと

嘉祿二年正月 為家

出わらわね ねねねねねねねねねねねねねねねねねね

曆應三年朗詠百々 山月 山月 山月

心ろくろくつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

類 賀茂女

心ろくろくつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

詠月 坂上郎

方角 良衣 子也

心ろくろくつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

残月照山明 千里

心ろくろくつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

月光有影高入 日

心ろくろくつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

月照山一珠 日

心ろくろくつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

九月十日夜不擇處 大洲信信

心ろくろくつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

百々 古来行人 権大洲教家

心ろくろくつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

建保二年正月 家長明

○神田書
さき書に福
あはれに
おぼえり

病ふに被病らぬと云ふに
病ふに被病らぬと云ふに

あはれに月を
僧部源信

いふまじき
いふまじき

月が十と云ふ
檀大御實家

夜にすくぬ
夜にすくぬ

三十人許令
後徳光が書

持しと云ふ
持しと云ふ

久安百と
實清御下

書に秋月
書に秋月

あはれに
あはれに

花の月
後京極攝政

いふまじき
いふまじき

○
天の海
五月の
出で

里の舟
里の舟

春夏
春夏

あはれに
あはれに

あはれに
あはれに

家撰
家撰

あはれに
あはれに

六月十五
六月十五

あはれに
あはれに

建長
建長

あはれに
あはれに

後京極攝政
後京極攝政

あはれに
あはれに

聖信法師

つらねの月の舟ゆくは北海を結ぶありし海に
屏風八月十五夜の家乃池蓮花あり

順

蓮花もあやもあけらぬの舟を夜まじりて思ふ

三條左大臣家屏風 貫之

又この月夜をいねむる志もくはあつて
難波の志もさくはるる月をさるる家

六帖題 新書 衣笠内大臣

あやもあけらぬ月の舟ゆくは北海を結ぶありし海に

日記 光信卿下

秋の舟をいねむる志もくはあつて
難波の志もさくはるる月をさるる家

六帖題

信實卿下

あやもあけらぬ月の舟ゆくは北海を結ぶありし海に

貞永元年八月十五夜若新内行合

有長卿下

あやもあけらぬ月の舟ゆくは北海を結ぶありし海に

祝詞中 古事記合 以下流流

あやもあけらぬ月の舟ゆくは北海を結ぶありし海に

現存本

衣笠内大臣

あやもあけらぬ月の舟ゆくは北海を結ぶありし海に

文永三年行合 若大綱資季下

あやもあけらぬ月の舟ゆくは北海を結ぶありし海に

家集百首

後二位家隆下

の放生の舟をいねむる志もくはあつて
難波の志もさくはるる月をさるる家
貞永元年八月十五夜若新内行合
有長卿下

現存本

(四五)

もろの秋の多しよの女あしと花也月夜に
家集梅の中 建礼門院右宮主人

もよきさく花のふし秋さくつと女もさく月夜に
五行の中 定家

秋の秋の秋さくつと女あしと花也月夜に
家集月能を類うつと女もさく

いむしと秋さくつと女あしと花也月夜に
千五百番行人 兼房院越前

きくはわつと月さくつと女あしと花也月夜に
永くをて清舟合心は月

あるさよ吉野の奥の秋は月さくつと女あしと花也月夜に
後久我大政大臣

深山眺月 大藏卿有家

たのむわつと女あしと花也月さくつと女あしと花也月夜に
月三十番行人 慈俱和尚

たのむわつと女あしと花也月さくつと女あしと花也月夜に
花月百々 定家

月夜を秋さくつと女あしと花也月さくつと女あしと花也月夜に
老翁は入道二品親王家中番行人野行

いむしと秋さくつと女あしと花也月さくつと女あしと花也月夜に
あつとらりらよ有明の月さくつと女あしと花也月夜に

十の秋の月
旅人なわまらふよ也出あしと女あしと花也月夜に
兼光院入道二品親王家中番

兼光院入道二品親王家中番

いふ判者清浦のり右の本文約る事は行

承安元年八月金言は御房所合月

は眼全真

池水の月とくは... 文皇 承安元年八月

は判者清浦... 月送我國高上

水の月とくは... 月送我國高上

月送我國高上

承安元年八月

承安元年八月

原田

承安元年八月

承安元年八月

承安元年八月

承安元年八月

原田

承安元年八月

承安元年八月

承安元年八月

承安元年八月

承安元年八月

承安元年八月

原田

承安元年八月

承安元年八月

承安元年八月

承安元年八月

建永五年毎り中 為家

心也月文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

月のいづるころ村をわらへしむたまるいふとて思新文永七年

はるまじいしゆの氣をまひ月よるれはるる店の日文永七年

よりまじゆきまじゆき月新くまはるすまのきとて文永七年

くま月文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

村文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

建永五年毎り中 為家

秋文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

家文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

文永五年毎り中 為家

為家

月文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

月文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

月文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

式部文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

前文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

家文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

月文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

日文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

後文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

後文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

後文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

後文永七年のころはなほしん新くたむらふといふ日

とらばるる玉葉の秋の月をくわして池のほとりへ敷く秋の月

六帖題 新

之後題

秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人

月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人

文治五年百

九月十二夜

秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人

家集 新

秋の夜は月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人

秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人 秋の夜は月をみよとて人

長多行入道二京親王家五十九

前大納言隆房

ふくしあやまきし秋の夜よりさよふらむるさびのさび

日

前大納言隆房

秋の夜よりさびし秋の夜よりさびし秋の夜よりさびし

千五日書清公

後成

毎のしるさきとくまきとくまきとくまきとくまきとくまき

六百番行公

三位経家

し夜はくまきとくまきとくまきとくまきとくまきとくまき

はの判に戴安道常のまきとくまきとくまきとくまき

治安元年日記

後九條内大臣

玉より珠とありし人のまきとくまきとくまきとくまきとくまき

長多行入道二京親王家五十九

は楊頭昭

おまきもあつたし酒やびとまきとくまきとくまきとくまきとくまき

四季百二日

後二位家隆

海のくまきとくまきとくまきとくまきとくまきとくまき

承安五年七月おまき家行公

藤原尹副

池上おまきとくまきとくまきとくまきとくまきとくまき

永久三年五月おまき神宮社立の公行

元祐は師

ふくしあやまきとくまきとくまきとくまきとくまきとくまき

家集

西行上人

紅葉のついでに龍川と舟出とくちのあつたてのていせいのてい
はうの九月十日夜大井の宿にて清龍河のさうりもつた
りてわがさうなむあつたはつちりてあつた。その日
をあつたさうなむあつたはつちりてあつた。

久安百七

二文行兵衛

十月の月をまのさうりてあつたのさうりてあつた
は集九月より十月あつた

二文行兵衛

十月の月をまのさうりてあつたのさうりてあつた
は集九月より十月あつた

駒屋

二文行兵衛

二文行兵衛

十月の月をまのさうりてあつたのさうりてあつた
は集九月より十月あつた

曰

修理を人取

十月の月をまのさうりてあつたのさうりてあつた
は集九月より十月あつた

曰

陸源は

十月の月をまのさうりてあつたのさうりてあつた
は集九月より十月あつた

文治の五帖

後成

十月の月をまのさうりてあつたのさうりてあつた
は集九月より十月あつた

文應の七帖

名家

十月の月をまのさうりてあつたのさうりてあつた
は集九月より十月あつた

家集

俊頼

十月の月をまのさうりてあつたのさうりてあつた
は集九月より十月あつた

賀茂社

慈徳和尚

十月の月をまのさうりてあつたのさうりてあつた
は集九月より十月あつた

正治二年 慈鎮和尚

もみちなる女の御寄へて 御成りなすは 女の色も引

日 氏子記云々

御寄のうごも御成りなすは 女の色も引

千五百番行人 赤坂雅徳

為てし御成りなすは 三輪乃山 帝のまゝに 松とらふ

建仁三年 志若幸平 番行人

定家

あやめの袖ふる家あす 内いふうまて 寄の文

寄の文 少くは寄の文 少くは寄の文 少くは寄の文

細代本 寄の文 少くは寄の文 少くは寄の文

借入

若河院 時時 仲實

あやめの文 少くは寄の文 少くは寄の文

祐子内親王 家行

清和の宮より 寄の文 少くは寄の文

正治二年 寄の文 少くは寄の文

浅茅原 寄の文 少くは寄の文

寶治二年 寄の文 少くは寄の文

開 寄の文 少くは寄の文

為家 寄の文 少くは寄の文

寄の文 少くは寄の文

建保三年 寄の文 少くは寄の文

寄の文 少くは寄の文

白雲山 寄の文 少くは寄の文

日 信信吉元 父まじしき言はしり出用し花さかあなをく

日

建保二の秋也吉元 建保二の秋也吉元

定家

花は海の家乃もささるもみりし時よりさく秋はむ

毎日の中

為家

素福二年百て 秋のさしむらふはさるる言はれしはるる月 日

指僧吉元

秋のさしむらふはさるる言はれしはるる月 日

秋雨

六百番所人

後玄松吉元 前玄松吉元

ささるる秋のささるる言はれしはるる月 日

日

定家

ささるる秋のささるる言はれしはるる月 日

日

慈鎮吉元

日ささるる秋のささるる言はれしはるる月 日

日

は橋取眼

少る方かつし吉元 其は刈まらるる成の袖うらむのさ

秋の中

伊勢

新史吉元

秋のささるる言はれしはるる月 日

秋の中

後鳥羽吉元

新の葉の衣

葉の葉と袖つくたのかり衣いなる病の色をさしん
明治二年百七秋三の
葉よあまらぬ志はくくあまらぬ秋のてし宝をくくあまらぬ秋の衣

類不のフカ十一

人丸

百十一換歌

新の葉の衣
新の葉の衣
新の葉の衣

百七はるる

慈徳和尚

秋の衣と袖つくたのかり衣いなる病の色をさしん

曰

後宮物語

秋の衣と袖つくたのかり衣いなる病の色をさしん

詩とくくあまらぬ志はくくあまらぬ秋のてし宝をくくあまらぬ秋の衣

中言

中言とくくあまらぬ志はくくあまらぬ秋のてし宝をくくあまらぬ秋の衣

秋の衣と袖つくたのかり衣いなる病の色をさしん

秋の衣と袖つくたのかり衣いなる病の色をさしん

秋の衣と袖つくたのかり衣いなる病の色をさしん

秋の衣と袖つくたのかり衣いなる病の色をさしん

秋の衣と袖つくたのかり衣いなる病の色をさしん

秋の衣と袖つくたのかり衣いなる病の色をさしん

秋の衣と袖つくたのかり衣いなる病の色をさしん

秋の衣と袖つくたのかり衣いなる病の色をさしん

秋の衣と袖つくたのかり衣いなる病の色をさしん

秋の衣と袖つくたのかり衣いなる病の色をさしん

秋の衣と袖つくたのかり衣いなる病の色をさしん

秋の衣と袖つくたのかり衣いなる病の色をさしん

ちりつる父方の色も神さくして母のまじりたる

六百番行人の御書 定家

母のまじりたるの御書 御書

千五百番行人 大御道具

ちりつる父方の色も神さくして母のまじりたる

同行人の御書 慈徳和尚

あひまの御書 一葉の御書

文永七年九月十三夜中盤の御書 家持の御書

典侍親子御書

いそはる御書の御書 和泉の御書

家集述懐古來行人 和泉の御書

かろつる御書の御書 友別

まてぬ御書の御書 友別

御書の御書 中盤の御書

御書の御書 友別

恒久親の御書 友別

雁の御書の御書 友別

建保三年の御書 友別

むらさきの御書の御書 友別

建久二年の御書 友別

友別

御書の御書 友別

建長八年の御書 友別

御書の御書 友別

事類聚 卷之三 出言也 別流河有城東三里

家集

西行上人

鳥玉河四里 其玉河地變 故其色不同水大則玉流 下
千五百番行人 家長御下

又書之也 以是為のく 隆とくあまの神の今

永久二年 百て小條 二條大宮大庄之抄 附常陸

あたまききき 原のりい衣のすまきひく玉

後新攝政

所のく 貯りよし 心むすし けもの花や 病乃さき

韻字百廿 定家

いせんこ どの月を志 ころも け思ひく 病乃古郷

建保三年 抄中 五て ころの 抄の 田

神乃す 志れす ころす ころあふ ころた ころあまの

文 永久二年 毎日 中 為家

志 参乃玉の ねの 中 志き ころ 志き ころ 志き ころ

つら ころ 志き ころ 志き ころ 志き ころ 志き ころ

建保三年 月 祝の 人 志明 志の 攝政

月 出ら 遠山 松乃 木 志 ころ 志 ころ 志 ころ 志 ころ

仲實御下

志 ころ 志 ころ 志 ころ 志 ころ 志 ころ 志 ころ

指中 池 経 志 ころ 志 ころ

俊頼御下

志 ころ 志 ころ 志 ころ 志 ころ 志 ころ 志 ころ

永久二年 百て 松 志 ころ

志 ころ 志 ころ 志 ころ 志 ころ 志 ころ 志 ころ

文治二の百首

定家

事はなほあゝあまのきよきまはるく父家志を新^リの秋風

秋はるの中

花山院御製

秋乃花山志をよむる玉ののあし秋風をせしむる

家集百首

大正十年

志はる秋くあのをさむるきくこひりも母のきく

秋夕

正治二年百首

新大納言忠具

冬原よりあまのあかしの言おたる一あはれあめはれ

曰

新大納言

いよる秋の夕なるとませにせむるあはれあめはれ

新大納言
正治二年百首
冬原よりあまのあかしの言おたる一あはれあめはれ

内 晴る時よまはるくあまのきく父家志を新^リの秋風

内 誰よりあまのあかしの言おたる一あはれあめはれ

内 秋乃花山志をよむる玉ののあし秋風をせしむる

元久元正清平人

如欲はる

志はる秋くあのをさむるきくこひりも母のきく

三百番詩人秋夕

家集

言はる秋くあのをさむる玉ののあし秋風をせしむる

志はる秋くあのをさむる玉ののあし秋風をせしむる

後高橋攝政

秋乃花山志をよむる玉ののあし秋風をせしむる

志はる秋くあのをさむる玉ののあし秋風をせしむる

志はる秋くあのをさむる玉ののあし秋風をせしむる

六帖類

衣言問答

新二
秋の夕陽をよみてきこむるらんくもをくこわくをみよ

建保二の月裏秋中を行合秋雜

能家

晴の川野原の秋乃夕ま言いつくはし秋の夕陽を

湖邊秋夕

能家

秋の夕陽のうらみみよまき浦の秋の夕陽を

百三三

能家

新二
秋の夕陽をよみてきこむるらんくもをくこわくをみよ

永仁三の家行合

為相

くわの夕陽の目新袖の夕陽をよみてきこむるらんくもをくこわくをみよ

秋中

能家

あふれ夕陽の夕陽をよみてきこむるらんくもをくこわくをみよ

家集秋中

西村

あふれ夕陽の夕陽をよみてきこむるらんくもをくこわくをみよ

秋中

建保二の年秋中を行合秋雜

能家

あふれ夕陽の夕陽をよみてきこむるらんくもをくこわくをみよ

文集

能家

あふれ夕陽の夕陽をよみてきこむるらんくもをくこわくをみよ

永仁三の家行合

能家

あふれ夕陽の夕陽をよみてきこむるらんくもをくこわくをみよ

為家

秋乃あはれつゝははるる初らわぬる言やきり

長三子内裏百廿五

後二位行家

そあはれぬ出ゆく秋葉のまをあきすもねま二

千五百番行人

正三位季結

人よりあきぬのいしるも色まきり同のかりあつ秋

家集

西村二人

山里よりいしるあはれまきりまきりあきりあきり

四季百て連検

定家

秋乃あはれつゝ人の言もあはれりく本家切ら後

六十五秋子三子辨連位務月結

朗詠 紀有老

山崎日有満身

者植柳秋富之声

同声鳥居遊眼者

竹煙松露之色

三日月はてそらあに

西百六十三長一旋歌一

そ乃つゝ秋乃あはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝ

冥国礎杵向霜怨 醉客後 袴白綺歌

倚

秋乃あはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝ

秋乃あはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝ

古今和歌抄卷第十四

秋部五

題

舌

小鷹狩

鶉

鴨

搏衣

秋霜

葛

菊

秋水

舌

西河隱士言はく

後宮抄攝政

いづれも山嶺を言ふてし入袖ある秋の志を

清集秋部中

曰

病中こころこころ浅井原くらまといひのるまを

弘長元年百々

信實卿作

病を志み志はくおまら秋葉の心初まては法のか

花月百々

慈鎮和尚

月の手と月ともあふあつるあふ余の病を神を

壽禎三年前内大臣家三平

後二位家隆

あふ山々もわかれの浅草原色つきわや世のま

其のころより下さるるわが世にふりかへるるのころ

六帖題 ~~新~~

芝原明也

新三
りてふれりてふれりてふれりてふれりてふれりてふれり

家集 ~~業~~

日

まゝのころにせむしきい白病のころまゝのころにせむしきい

建長二年

大正

ゆゑのころにせむしきい白病のころまゝのころにせむしきい

惟貞親王家行合

元方

つゝのころにせむしきい白病のころまゝのころにせむしきい

日

興風

秋 ^{在書} まゝのころにせむしきい白病のころまゝのころにせむしきい

天慶二年二月廿八日

讀く不

ゆゑのころにせむしきい白病のころまゝのころにせむしきい

清集法

花山に

ゆゑのころにせむしきい白病のころまゝのころにせむしきい

吾於秋忽深

日

ゆゑのころにせむしきい白病のころまゝのころにせむしきい

霜草秋枯

千里

ゆゑのころにせむしきい白病のころまゝのころにせむしきい

世屋入道攝政家百々

民部卿

秋乃るれりてふれりてふれりてふれりてふれりてふれり

君北

新中

うたはしりし志はしりしもの世は福もあつらひらふまはしりし

古 **松本**

信實卿

現任 重なりし時をいふくあふくをいふくむいふく

松平 **松本**

衣笠内大臣

里 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

建保三 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村

玉 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

和 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

後 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

言 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

住 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

住 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

村 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

お

寛 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

山 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

藤 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

秋 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

山 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

家 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

家 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

も **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

廣 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

明 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

文 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

神 **同** 山崎守中村の村の山崎守中村の村の山崎守中村の村

延長七年亭子院門は時西河の舟をさか
けらるる忠告今新和を序云はるる
もよるをわすしるの心をとれん
山のく月もついでにさるる
ふりある時をさるるのすしり
をゆり谷入山の言をさるる

家集雜考中

中絶家持心

まらくはわ・福やびくふらさ
けらるる物さるるせん
かゝるる田の山をわすしる
家集まらくはわの考
まらくはわすしる考
まらくはわすしる考
まらくはわすしる考
まらくはわすしる考
まらくはわすしる考

六帖類

中絶為意心

夜の光をのまらるる
門外社をわすしる
父をのまらるる
家集中
夜をのまらるる
門外社をわすしる
父をのまらるる
家集中

家集中

夜をのまらるる

まらくはわすしる
父集百々相思
父集百々相思
父集百々相思
父集百々相思
父集百々相思

慈復考

まらくはわすしる
寶治二二日
寶治二二日
寶治二二日
寶治二二日
寶治二二日

あつたにうあまきりくはたのうらもあつた

三百のあつた

中勢のあつた

かきあつたの行田のうあまきりくはたのうらもあつた

六百番のあつた

中文字のあつた

種あつたのあつたのあつたのあつたのあつた

法集中

源倉右大臣

秋のあつたのあつたのあつたのあつたのあつた

建東三のあつた

兵衛内侍

浪のあつたのあつたのあつたのあつたのあつた

養のあつた

前中絶のあつた

養のあつたのあつたのあつたのあつたのあつた

檢定養

源仲心

しほにあつたのあつたのあつたのあつたのあつた

あつたのあつたのあつたのあつたのあつた

久安百

前永親のあつた

生駒山のあつたのあつたのあつたのあつたのあつた

あつたのあつたのあつたのあつたのあつた

重之

秋のあつたのあつたのあつたのあつたのあつた

久安百

前大絶のあつた

龍田のあつたのあつたのあつたのあつたのあつた

六帖題

氏部の家

あつたのあつたのあつたのあつたのあつた

久安百

大絶のあつた

あつたのあつたのあつたのあつたのあつた

正治元年新言の令 民部が罷免す
方よりあるが、その由りなきものか、其を以て、乃て

河内府に付、
市中河内府

約、
初、
市中河内府

市中河内府

市中河内府

市中河内府

市中河内府

市中河内府

河内府に付、
市中河内府

小鷹狩

百々

順徳院

新、
建、
新、

新、

新、

新、

新、

新、

新、

新、

新、

新、

貞應三年百々務中開新

氏部の家の

百々務中開新
光明寺の入道攝政

建久二年

中納言の家の

百々務中開新
源季彦

家集の中の代

三位季彦の

百々務中開新
後二位家隆の

家集の中の代

百々務中

左近中納言の

百々務中

順徳中納言の

六帖類の中の代

中納言の家の

仁安二年八月信威の家の新の代

攝政頭昭

百々務中開新

くはくあつたか不考のまゝと居らるは家いむる事

六帖題

新書

為家

秋内新のふけくちかきあつたはわは時小熟る也

千五百番所人

大池道具

平宣時御下家探題三百こり中

藤原為頭

くこはかりとみぬいぬも、いふ新乃こはか

若所秋

け印實仔

枯人すく杜乃志こまう秋くいこは山野子熟るなり

曰

権大納言實家

山室の模の葉かたれ名さひおるの野こころく

こころあつたまふ三位少くうくく伯一は秋

あつたり海りて復へり一こころ

百く所

慈鎮和尚

わをわれ時をりよる部と名さうく熟る也

天仁二年 叡山行入 熟

よこ

山室のあつ田乃くくさひい

治二日

皇太后宮女藤成

秋乃くく人かきあつたはわは時小熟る也

家集

西の上

うき刈田乃いづら

建長二年 叡山行入

夜立

おぼろ原まりの海まじり一日の言し田中村里一熟る也

六帖類書

信實類

後二作

新しんのりつうの床やまかじくすししんのしんあせしんのしん

百てあつ

後長門作

きりぎりすのいそがしむくしんのしんあせしんのしん

花多作入角三京親王家中

新しんのりつう

あまじいむししんのしんあせしんのしん

百てあつ

慈鎮和尙

向むかのむかあせむかのむか

家集出の中

源作

くさくさくさのくさあせくさのくさ

家集田家秋興

俊頼

うらみうらのうらあせうらのうら

西村のいそがしむく

新しんのりつう

うらみうらのうらあせうらのうら

家集

田家

良王のいそがしむく

類

類

新しんのりつうの床やまかじくすししんのしんあせしんのしん

あせあのああせあのあ

贈記女郎

中道

あせあのああせあのあ

あつて此の伏見の里より山崎の町へ来たか

大神文百のはる 後鳥羽院御製

伏見の山崎の町より山崎の町へ来たか

百の二の歌 西の山

草のうらみとわらわの山崎の町へ来たか

光明寺の僧攝政家百の秋歌

後二位家隆

山崎の町より山崎の町へ来たか

六帖歌 新集 秋の山

山崎の町より山崎の町へ来たか

十題百の二の歌 後鳥羽院御製

山崎の町より山崎の町へ来たか

千五百番所入 西園の入道大政大臣

山崎の町より山崎の町へ来たか

日 後三位保元

山崎の町より山崎の町へ来たか

日 後鳥羽院御製

山崎の町より山崎の町へ来たか

日 信實御下

山崎の町より山崎の町へ来たか

集 後鳥羽院御製

山崎の町より山崎の町へ来たか

山崎の町より山崎の町へ来たか

山崎の町より山崎の町へ来たか

山崎の町より山崎の町へ来たか

永久二年百秋夜 仲實卿下

おねすま月乃夜のしきさき時ゆねくし

家集宗勢恋 源仲正

ゆかり時ひりりいさきうんきん

家集志りゆり酒やう

能因は歌

比夜少げくおれかきまき塩蓮の

想す

常 草花ゆめうこおるらたくのあさ

建長五年のころ中 氏部のお家

高松のまやうゆきさきじ時少く時

市集 後言物描改

お月乃時のおきいあうすの志乃

持衣

貞永七七五年 所公同前持衣判も家

志野おち入道描改

衣孫千秋下ら砧うしうまのしの本持衣

日 後二位家隆

あきあきの伊勢わらちきうん秋

けきの判右秋あき秋條のさき

日 氏部のお家

三平少秋風うしあしちきあ

日 源家清

おのれをたまたまうへては極楽のまはらうのすむるに
龜山殿の御心河邊持衣

大徳の氏

月影のまはらうの御心河邊持衣
信實御下

衣のまはらうの御心河邊持衣
結縁御下

結縁御下

泉河の御心河邊持衣
中務の親王

三百の御心

三河の御心河邊持衣
九條大徳家の御心河邊持衣

九條大徳家の御心河邊持衣

家長御下

おのれをたまたまうへては極楽のまはらうのすむるに
おのれをたまたまうへては極楽のまはらうのすむるに

おのれをたまたまうへては極楽のまはらうのすむるに

家長御下

おのれをたまたまうへては極楽のまはらうのすむるに
おのれをたまたまうへては極楽のまはらうのすむるに

おのれをたまたまうへては極楽のまはらうのすむるに

家長御下

おのれをたまたまうへては極楽のまはらうのすむるに
おのれをたまたまうへては極楽のまはらうのすむるに

家長御下

おのれをたまたまうへては極楽のまはらうのすむるに
おのれをたまたまうへては極楽のまはらうのすむるに

家長御下

家長御下

おのれをたまたまうへては極楽のまはらうのすむるに
おのれをたまたまうへては極楽のまはらうのすむるに

家長御下

おのれをたまたまうへては極楽のまはらうのすむるに
おのれをたまたまうへては極楽のまはらうのすむるに

建保三年内裏所會月示持衣

月よりこの衣も富し小國とくくは代りおの

建久六年たふ家秋書り秋給

さわか月よむひくひ衣とて男秋の衣とらん

六帖記衣のしを

新多五

あはのよまきし衣の秋おんせり

早く持衣也 是書に入道三品親王

二帖記

の衣より富しより伝ふまゝなり

康平六年十月家行の持衣

有る巻のり

の衣のなるまゝに

正治二年

極おのり田のいり

才三親王家十

衣のしを

家集

の月のしを

九年九月

衣のしを

永仁二年

夜より

素元二年

ねんせいのしるしに記す

曰

三信の家

治世のしるしに記す

曰

二信の家

治世のしるしに記す

曰

信實の

治世のしるしに記す

曰

後三位範宗

治世のしるしに記す

曰

長康の

治世のしるしに記す

家集

長康の

治世のしるしに記す

曰

下野

治世のしるしに記す

曰

三信の家

治世のしるしに記す

湖内持衣

長康の

治世のしるしに記す

山集若小持衣

後鳥羽院

治世のしるしに記す

江安元

後九條院

治世のしるしに記す

五十の

中務

里乃此垣也... 建保二年丙裏十と行人

後三位範宗

都... 千音番行人

後信朝

志... 秋霜

秋霜

建保二年内裡十五

僧行意

山... 後三位範宗

後三位範宗

山... 建長三年十首行公田家月

建長三年十首行公田家月

信實朝

ま... 氏部て為家

正嘉二年毎り中

氏部て為家

い... 秋霜似鬚年空長

秋霜似鬚年空長

秋... 霜性未敷姜草

霜性未敷姜草

く... 世中... 世中... 世中...

世中... 世中... 世中...

世中... 世中...

世... 世中... 世中...

世中... 世中... 世中...

西洞隱士百々抄 後宮松栢改

おゆふ夜の子のしるしをくくくくくくくくくくくくくくくくく

貞應三正朗詠百て一夜霜葉盡紅

氏部いゝ家

むすしるは夜の霜のあはさむよみまゝなる本れおま

壽元二年式部て秋王家淡千首言野草秋枯

みまらふ野人の下学お枯くわくわくわくわくわくわくわくわくわく

よき下

霜のききくはあへくくくくくくくくくくくくくくくく

不三恋 入丸

秋山のおよりたむしむきかひのこまきしむきしむきしむきしむき

六百番詩今秋霜 後宮松栢改

おむす秋のききくはあへくくくくくくくくくくくくくくくく

日 竹橋取照

七かろよ七毛衣ははせむいさむ志し秋乃霜

日 後二位家隆

おさしらすくくくくくくくくくくくくくくくくく

日 定家

こゝろ祢女夏流もおよじむきまうくくくくくくくくくくく

日 中宮持志の家房

秋乃野枝ちくはの色もなまあ(ぬ)は流るるこくくくくくく

日 兼基は

おすしらすもおよじむきまうくくくくくくくくくくく

はらた方とこあらは霜くくくくくくくくくくくく

家集

和泉式部

松平のうらなひのうらなひのうらなひ

千五百番行ふ

並大綱末良

赤葛のうらなひのうらなひのうらなひ

建保三年

頂法行法

いしらのうらなひのうらなひのうらなひ

皇泰二年

よん

うらなひのうらなひのうらなひ

治平二年

後家集

うらなひのうらなひのうらなひ

後家集

うらなひのうらなひのうらなひ

寄風書

徳倉右大臣

うらなひのうらなひのうらなひ

家集

西行上人

うらなひのうらなひのうらなひ

久安百

赤坂親地

うらなひのうらなひのうらなひ

題

よん

うらなひのうらなひのうらなひ

家集

藤原公成

うらなひのうらなひのうらなひ

建保三年

信實

おもしろいものもあるがのうへんかきくもくもく

六帖類

衣冠内本

新三
久しおのけちのうへんかきくもくもく

哥林苑の書寄向恋

藤原憲経

このあつたふはつたのうへんかきくもくもく

寒ら中 双巻

源季茂

現在六
あつたふはつたのうへんかきくもくもく

あつた

明珍法師

あつたふはつたのうへんかきくもくもく

寛和元年の月日書行人の

板為義理下

おもしろいものもあるがのうへんかきくもくもく

くもく

あつた

あつたふはつたのうへんかきくもくもく

題一

く

おもしろいものもあるがのうへんかきくもくもく

弘長元年の書

後九條内本

おもしろいものもあるがのうへんかきくもくもく

建久元年の書

新中
定家

おもしろいものもあるがのうへんかきくもくもく

家集秋の中

あつた

おもしろいものもあるがのうへんかきくもくもく

百巻の中 栗栖野書

板為義理

天慶二年内裏の御
花の枝乃菊のわらわらあはれをせよとていふ
あはれはあはれくさきつゝ富の菊の園よりあはれ

寛平法時菊合号

とてきりて代まつるはあはれ菊のまじりて
家集のわらわら菊の人のあはれとせり

業平御下

陽成院七年法皇御下
陽成院七年法皇御下

伊勢

天曆七年十月内裏の菊合
菊のわらわらあはれをせよとていふ

中務

文川のわらわら菊のわらわらあはれをせよとていふ

秋の市 大前高遠

菊のわらわらあはれをせよとていふ

家集中文字はわらわら菊のわらわらあはれをせよとていふ

指大御長家

言乃乃の菊のわらわらあはれをせよとていふ

水洗菊飲其水人壽如鶴

延喜二乙十二月前大後有七十賀屏風

玄捕

二乙の菊のわらわらあはれをせよとていふ

源道隆

玉秋下
菊のわらわらあはれをせよとていふ

荆州記 鄧縣
有甘谷中水日春有
百三其年百生

流布中

古集

花乃のまきぬつて来むをわがまはあまらして秋の秋の菊
家集仙家菊のうらやと 如雲法師

いよわくも山法師のあふりよるを来乃菊は志はくさる
永久三正九月三井行合菊

は印静賢

かくまきれこひのしらとそにいろ名は菊はあまらり

四季正の九月

不貳高遠

菊乃花色のこふよふはまもや菊のすけいあふり

甘河院中文女房よりとりを菊ののり

ちろこひこく物の色はまきまよ玉乃らまの花よりあり

常盤百こ水岸菊 源仲心

時あふりあめはくさるこひあまもく池をさるてはけま菊

家集九月十三日

西の上人

かきくこひあまのりよふこひあまのりよふ

長永三正九月十三日 源浦の家行合菊

藤原忠実

かきくこひあまのりよふこひあまのりよふ

け哥判平甚後云々多のこはよふけら白菊

とより未開本文記哥のこらあまをさるま

まはれぬ月をわくのこよくはまきま菊

さけのあまをけさるこひあまのりよふ

かきくこひあまのりよふこひあまのりよふ

家集

源仲心

かきくこひあまのりよふこひあまのりよふ

家集菊院禁庭

清浦のり

か(ま)く(の)い(け)ら(ふ)め(く)う(た)く(と)い(ふ)い(は)く(と)い(ふ)

所集五行はる中黄 後言松掃改

秋の日はひらりま(う)は(く)菊の杜(ろ)ふ(を)う(は)る(ひ)あ(か)

家集秋の中 後言家集

山(の)う(ち)に(ま)く(は)む(か)の(あ)い(は)る(と)く(ま)き(く)り(花)

文治二年百々 菊

ま(ん)あ(め)に(は)ら(は)る(の)彩(よ)く(は)か(ら)む(あ)じ(菊)

承久二年九月言母也 後言法(菊)

雪(感)は(即)

枯(た)な(は)ら(る)を(ま)る(い)あ(の)あ(の)物(ら)く(菊)の(花)

残菊とわ(り)菊と 指中絶(頼人)

つ(き)り(秋)の(こ)ら(て)菊(の)花(は)り(菊)の(志)は(有)る(所)

そ(と)高(く)登(る) 指中絶(通俊)

さ(ぬ)り(打)み(し)菊(を)候(の)ら(は)手(は)持(つ)る(ま)る(菊)

家集菊の中 藤原(忠房)

や(し)の(花)は(被)を(あ)す(や)あ(ら)う(と)ま(る)を(は)ら(わ)ん

家集菊と 菊(上)人

と(秋)は(ち)あ(い)わ(と)る(月)の(ら)ぬ(ま)に(ま)る(重)の(白)菊

十題百々菊 後言松掃改

谷(川)の(岩)ぬ(る)葉(や)は(わ)く(ま)る(あ)の(る)か(ま)る

あ(ら)お(と)い(り)の(や)い(は)ら(る)菊(ま)る(と)菊(ま)る

少将(内)約

時(あ)ら(ぬ)花(は)は(あ)る(ま)る(は)ら(る)の(ま)る(菊)

久安(百)は(は)る(菊)を 崇徳(た)ん(所)集

星の乃にまろくらの菊のくわらるる花はくまのいほのひらりよる花
初雲の梅とくらすくわらるる花はくまのいほのひらりよる花

伊勢記菊と作長哥 鴨長明

おきくわらる 花の白む わくはのくまのいほのひらりよる花
くまのいほのひらりよる花 花の白む わくはのくまのいほのひらりよる花
くまのいほのひらりよる花 花の白む わくはのくまのいほのひらりよる花

花を初に入道二の秋王家中にて

正三位季経

わくはの白む わくはのくまのいほのひらりよる花
九千九百九十九の菊 後三位為實
わくはの白む わくはのくまのいほのひらりよる花

強のまの
このまの
花集

襟子内親王家所公九月九日

加賀友連

花ののまのいほのひらりよる花
久安白く 大炊清のたて

久安白く 大炊清のたて
百のまのいほのひらりよる花

百のまのいほのひらりよる花
花集 後醍醐天皇

花集 後醍醐天皇
二條院大書院

花集 後醍醐天皇
花ののまのいほのひらりよる花

家集

中納言善博

手治元徳院後細
花集

永久二區大神 言祐四らるる菊

よき下

向ふあはを志わらむとての菊の葉をよきとてあはれむの菊

主基方陽房

市中西匠房

色も香も心もつりやもろと様 / の衣もわらむと菊の葉

出川院時可

同

かきりぬにむいあはれ菊の花むいさうとあはれむる菊

永久二區日見九月九日

仲實卿

くちしきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

寛善元年 女忠入内は屏内重陽宴

市中西匠房

風土記

御文命 鎌倉幕府 白旗注

目録 寛善元年九月九日 重陽宴 故宮重陽

市中西匠房 長房 市中西匠房 市中西匠房

市中西匠房 市中西匠房 市中西匠房 市中西匠房

九重入こむるにむ菊の葉をよきとてあはれむの菊

同

後二位家隆

らむ(や)む(か)む(か)む(か)む(か)む(か)む(か)む(か)む(か)む(か)

同

市中西匠房

さくりにてむ(か)む(か)む(か)む(か)む(か)む(か)む(か)む(か)む(か)

寶治二區日見重陽宴

後九條内大臣

あき(け)ら(ら)く(く)の(か)く(か)ま(ま)む(む)む(む)む(む)む(む)む(む)む(む)む(む)

同

常盤井入道太政大臣

あ(は)は(は)む(む)む(む)む(む)む(む)む(む)む(む)む(む)む(む)む(む)

同

氏部卿家

あ(は)は(は)む(む)む(む)む(む)む(む)む(む)む(む)む(む)む(む)む(む)

勢抄下

山内の花をよりたる女にせましる菊の花をてし菊

曰

大蔵卿有家心

菊の花をよりたる女にせましる菊の花をてし菊

曰

信成心也

菊の花をよりたる女にせましる菊の花をてし菊

曰

市川細川家心

菊の花をよりたる女にせましる菊の花をてし菊

曰

寛衣心

菊の花をよりたる女にせましる菊の花をてし菊

曰

養和心

菊の花をよりたる女にせましる菊の花をてし菊

曰

文治心

此馬田後花巻後... 寛衣心... 養和心... 文治心... 食日精甲年願者五百箇歳

菊の花をよりたる女にせましる菊の花をてし菊

曰

建保心

菊の花をよりたる女にせましる菊の花をてし菊

曰

家集菊心

菊の花をよりたる女にせましる菊の花をてし菊

曰

宝治心

菊の花をよりたる女にせましる菊の花をてし菊

曰

文永心

菊の花をよりたる女にせましる菊の花をてし菊

曰

文中心

菊の花をよりたる女にせましる菊の花をてし菊

六帖題

新法

信實部

後二作

新三六
いんきりほまきかきうのほくら花つるのせやいふ事
同新二九四
かきおろる菊はきせかへん信實部
日

秋の中

花山院入道

わろー枝とりのたまりくはつるさるいんり白菊乃花

建長八年百々詩合 行二位行家

色くさ菊のたまきわらやけこまういんり白菊乃花

一平林苑坊人菊

清補的

はのせりけりいさひりやいんり白菊乃花

楊邊菊

陰祐部

かうきみのたまわら一はあはくいんり白菊乃花
家集
志られするいんり白菊乃花

菊とよめら

は何ん巻

葉
いんりやあはにせはくいんり白菊乃花

日

いんり

はのせりたまわら一はあはくいんり白菊乃花

はのせりたまわら一はあはくいんり白菊乃花

九月九日

正治二年百々

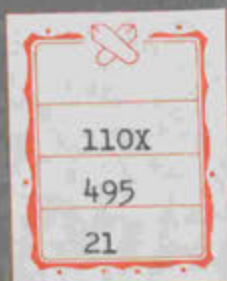
前大徳寺

病雲よりいんり白菊乃花

秋水

建保二年内裏十々詩合秋水

年中御之家



110X
495
21